

第5分科会 小学校

地域の教材を活用した道徳授業

～「地域へのかかわり」を考えるための一助として～

北見市立東相内小学校 教諭 伊藤 聡

1 はじめに

本分科会のテーマは、「今日的な課題，地域性等を生かした道徳教育」である。本実践では，この数年間に取り組んできた実践から主に「地域の課題」，「基本的な生活習慣」について実践してきたものをもとに考えてみたい。

北見市においてもコロナ禍による生活環境の変化は大きく，地域と子供たちとのかかわりが以前に比べ，少なくなってきたのを実感しているところである。分科会テーマの解説にも「その学校で行われる道徳教育を地域全体で推進していくことが，子どもの基本的な生活習慣の確立や，自制心や規範意識の醸成，生活の自立や社会的自立へむけての成長を促進する力となる」とある。学校は，子供たちの規範意識や基本的な生活習慣を育み，地域とのかかわりを作る上で重要な役割を持っている。

本稿では，主に2つの実践について記す。

1つ目は，地域素材を題材にした実践である。地域における課題（ごみのポイ捨て）を授業で取り扱うことで，子供たちに，環境についてより身近なものとして考えさせるために有効な手立てになるのではないかと考えた。

2つ目は，基本的な生活習慣である「あいさつ」についての実践である。本校の課題として「あいさつをすることが苦手な子が多い」という実態がある。そこで，よいあいさつについて学び，あいさつをするとどのような気持ちになるのかを考えることで，あいさつを意欲的にしようとすることを目指した。

2 地域・児童の実態

北見市は，人口が約11万人である。また，面積も約1430km²と広大なため，小学校22校，中学校13校，義務教育学校1校とこの規模にしては学校数が多い地域である。

本校は，小規模校ということもあり，子供たちの顔や大まかな実態などが職員にも周知されている。また，総合的な学習の時間には，地元の水田を借りて，地域の特産物である「もち米」の栽培の方法について，地元で働く農家の方に教えていただいたり，ゲストティーチャーとして北見市の特産物である「玉ねぎ」の育て方を学校に来校し，教えていただいたりするなど，地域との距離も近い。

3. 実践について

本稿では，今年度と昨年度に行った2つの実践について紹介したい。

- ・地域のゴミ問題を扱った「自然愛護」に関する実践。今年度5年生（男子9名，女子9名，計21名）で行った。
- ・「良いあいさつとはどんなあいさつか」を考え，練習する実践。昨年度2年生（男子11名，女子12名，計23名）で行った。

以下，授業毎に実践の様子を紹介する。

(1) 地域のゴミ問題を教材とした「自然愛護」に関する実践

実施日：令和4年7月13日

教材名：一ふみ10年

内容項目：D-20 「自然愛護」

ねらい：主人公の体験や地域のごみ問題を通して自然環境を守るために大切な心は何か考えを深める。

1つ目の教材は，「一ふみ10年」である。資料の概要は以下の通り。

長野県南東部にある「立山」に来た勇は、その美しさにすっかりよってしまった。写真を撮ろうと思い、うっかり貼ってあったロープから足をはみ出してしまった勇は、自然解説員に注意されてしまう。

その後、立山の自然について説明を受ける中で、昔から立山にある「一ふみ10年」という言葉を教えてもらう。それは、「高山植物をふみつけてしまうと、元のようにするには10年以上かかる」という意味の言葉である。勇は、解説員の言葉一つ一つを胸に刻み付けるのであった。

①導入について

まず、東相内地域にはどのような自然があるのかを訪ねた。子供たちからは「森」、「藻岩山（学校の裏手に見える大きな山）」、「無加川（学校近くに流れる川）」といった様々な自然が出てきた。子供たちにとっても、地域の自然はなじみが深いものである。その後、地域の自然への印象を聞いた後、本時のテーマを設定した。

テーマ

自然を守るために必要な心は何か？

まずは、今段階での考えを発表してもらった。（授業前と授業後の変容の把握をするため）

子供たちからは、「大切にしようとする心」、「残していきたいという心」などが挙がった。

②展開前段について

資料範読後、「勇が学んだことは何だろう？」と尋ねた。考えがまとまらない（浮かばない）子のことも考慮し、最初に数名の意見を聞いてから、ノートへの記述の時間を取った。

その後、ノートの交流を行い、参考になったことやなるほどと思った友達の意見などを赤鉛筆で付け足す活動を行った。

ノートの記述からは、「花にも一つ一つの命がある。」、「高山植物は一度踏むとなかなか元には戻らない。」、「自然を傷つけてはいけない。」など本時のテーマにつながる考えが多くあった。

その後、「先生が無加川に行って撮ってきた写真です。」と説明した後、川に落ちていたごみの写真を数枚提示した。コーヒーの缶やビンの破片、漫画の本などを見せると、子供たちから「えー！」というどよめきが起こった。

その後、「ゴミを捨てちゃだめだということは捨てた人もきっとわかっていると思うんだけど、どうして捨てたと思う？」と尋ねた。

考えをノートに記述し、友達と交流しながら、自分の考えを深めていった。記述には、「面倒くさかった。」、「捨てる場所が無かったので仕方なかった。」など人間の心の弱さについて記されたものも多くあった。

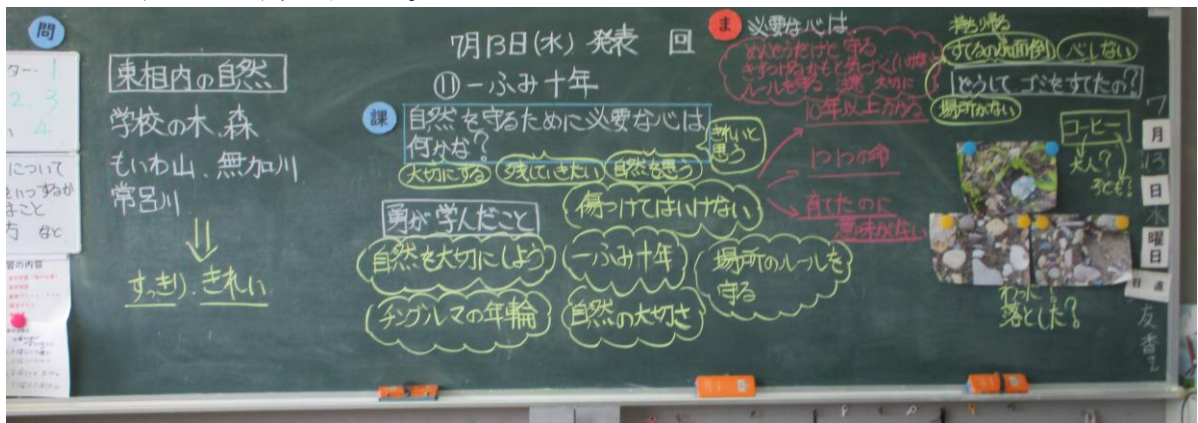
③展開後段について

その後、改めて「自然を守るために大切な心は何か」を問いかけた。

授業前に聞いた内容とは変化が見られ、「ルールを守る心」、「この行動が自然を傷つけるかもしれないと考える心」、「面倒でもきまりを守ること」などより具体的な取るべき行動にも触れられた記述も見られた。

④まとめについて

まとめの段階では、この時間で学習したことやわかったことについて記述させた。



以下、記述された内容を一部紹介したい。

- ・自然を守るには一人だけじゃなくて、みんなで大切にするという気持ちが必要だと思った。(男児)
- ・今日の授業を受けて、今までもポイ捨てをしてはいけないと思ったけれど、もっと守るようにしたい。(女児)
- ・今まではあまり考えていなかったけど、自然を大切にできたらいいと思う。(女児)

⑤成果・課題について

「成果」

- ・地域の素材という子供たちにとって身近なものを用いることで、より現実味を持って考えようとしていた。
- ・テーマに対しての子供たちの意見の変容が多く見られた。ごみのポイ捨てという人間の心の弱さに触れる機会を与えられたことで、より興味を持って思考できたのではないかと考えられる。

「課題」

- ・「ポイ捨てはダメ。」というように「提示した事実」だけにしぼったまとめも散見された。写真によるインパクトが強く、限定的な思考になったためと推察される。自然を守るための“心”についてより深く考えられる機会の設定が必要であった。
- ・本来であれば、より「人」に特化した教材を作成すべきであると考え。「自分を支えてくれる地域の人たち」や「ボランティアとして学校を支えてくれる方たちの存在」など子供たちは多くの人たちに支えられている。例えば、「もち米」の栽培方法を教えてくれる農家の方たちの願いや思いを教材化できないか、今後も考えてみたい。

(2)「良いあいさつとはどんなあいさつか」を考え、練習する実践。

実施日：令和3年4月16日

教材名：あいさつ月間

内容項目：B-9 「礼儀」

ねらい：良いあいさつについて考え、実践する経験を通して、あいさつの良さについて考える。

2つ目の教材は、「あいさつ月間」である。教材の概要は以下の通り。

朝の会の時に、先生があいさつ月間のことについて知らせ、良いあいさつとはどのようなものか考えるように子供たちに促した。

それがどういうものかわからない私だったが、家庭での体験により気持ちの良いあいさつについて知る機会を得た。

その後、教室で背筋をピンと伸ばして挨拶をし、先生にほめられることができた。

①導入について

みんなが使うあいさつにはどのようなものがあるか尋ねた。生き生きと元気に発表する子供たち。「おはよう」、「こんにちは」、「いただきます」など日常的に使われるあいさつから、「はじめまして」、「ありがとう」といったものまでたくさんのおいさつが出てきた。

その後、本時のテーマを設定した。

テーマ

よいあいさつってどう言えばよいのかな？

その後、今段階でどう思うか考えを発表してもらった。



「敬語で言う。」など「話し方」に関わる考えだけでなく、「ニコニコして言う。」「元気に言う。」といった本時で考えさせたい「態度」に関わる考えも出てきた。

②展開前段について

資料範読後、「男の子にあいさつをしてもらってお父さんはどんな気持ちになったと思う？」と尋ねた。2年生になって間もない時期ということもあり、近くの友達と交流させた後、数名の子に発表をしてもらい、それを板書した。その後、「もし、どうやって書いたらいいかわからない子は、〇〇さんや〇〇さんが言ってくれたことを使って考えてもいいよ。」と伝えてから、ワークシートに記述させた。

記述には、「ありがとう。」「すっきりした。」などポジティブな言葉が多く見られた。

その後、「男の子のあいさつのどんなところがよかったのかな？」と伝え、交流する時間を取った。

子供たちの話から、「おじぎをする。」「相手の方を向く。」「せすじをピンとする。」という3点が挙がったので、「あいさつのポイント」と称して、板書した。

③展開後段について

「あいさつのポイント」を押さえた後、実際に友達や教室内の先生に「こんにちは。」とあいさつをする練習をした。ともすると、何人にあいさつしたかという「数」が先行し、雑なあいさつになってしまうことも懸念されたため、まずは教師が良いお手本と悪い手本を見せ、丁寧なあいさつをするように意識づけを行った。

数分間時間を取ってあいさつの練習をした後に、「良いあいさつをしてもらってどんな気持ちになったかな？」と尋ねた。子供たちからは、「嬉しい。」「かっこいいと思った。」「良かったなと思った。」などの感想が出された。

④まとめについて

まとめの段階では、今日の授業を受けてわかったことや考えたことをワークシートに記させた。

以下、記された記述を一部紹介したい。

- ・あいさつのしかたがよくわかりました。(男児)
- ・あいさつをしてもらってうれしいきもちになりました。(女兒)

⑤実践の成果と課題について

「成果」

- ・あいさつをする練習をすることで相手意識が芽生え、意欲的に参加することができていた。楽しい活動ということもあってか、教室内に元気なあいさつの声が響いていた。
- ・その後、廊下ですれ違った先生にあいさつをするときにも「おじぎ」をするなど意識している様子が見られた。地域で子供たちの安全を見守る「スクールガードリーダー」の方にも挨拶をほめられたと嬉しそうに話していた。

「課題」

- ・より多くの大人たちにあいさつをする機会を設定できたらよかった。参観日などの機会を使って取り組んでみてもよかったかもしれない。
- ・般化させる機会を十分にとることができなかった。今回、学習した「良いあいさつ」を何か違う機会で見かすということができれば、より身につけることができたのではないかと考える。

4 おわりに

本実践2つを振り返るにあたっての課題の1つに「他教科との関連」を挙げたい。

例えば「生活科の町探検で地域の人に会うので、あいさつをする練習をしよう」ということや「総合的な学習の時間に関わった地域の方たちを教材化した授業」など、様々なアプローチが考えられる。

コロナ禍ということもあり、地域の方々と直接交流をさせていただく機会も減ってきている昨今であるが、地域の方の子供たちへの想いや取り組みを知り、教材化し、授業で扱っていくことで地域と子供たちをつなぐ「架け橋」のような役割に学校がなれるのではないだろうか。

私自身も、クラスの子供たちに地域の方の温かみや想いを伝えられる教材づくりにこれからも励んでいきたい。